

愛と施設…？

一瞬、40年前の新聞記事かと思うようなタイトルと内容。

この事件は記事にあるように2014年11月、大阪市浪速区のマンションでの出来事。詳しい状況は分からないが、次男が身体的の重複の障害者（44歳）、母は当時74歳、長男は2011年から同居、父親は2007年に死去し、それ以降はしばらく完全に母親だけの介護だったようだ。

同じような生活状況に置かれている障害者は東住吉区にも何人も居る。50歳代の重度障害者（なぜか男性が多い）と80歳代の母親の二人暮らし、母も認知症が進んできて母にケアが必要になってきているというパターン。相談支援を自立生活センター・ナビでも行っている。これは古くて新しい問題で、40年前神奈川の「障害児殺し」事件の減刑嘆願運動に当時の青い芝の会が「異議」を申し立て、「障害者は殺されて幸せなのか？」と問いかけた。「殺される立場」を鮮明にし、そこから「われらは、自らが脳性マヒ者であることを自覚する。われらは、強烈な自己主張を行なう。われらは、愛と正義を否定する。・・・」などの行動綱領をつくっている。当時はヘルパー制度を含め、地域で生きるための制度は本当に何も無かった。障害者対策は施設建設しかなかった。40年がたったが、介護、日中活動、相談支援、バリアフリーなどの施策はそれなりに充実してきた。選択肢は増えている。ただ親や家族の意識は簡単には変わらないだろうし、特に当時は「障害児を生んだ母親の責任」が強調され、死ぬまでわが子の面倒をみるのが社会通念だったと思う。ただそれを乗り越えて、どう関係を作り、支援するのかが問われているはずだ。

記事では残念ながら、本人の思いや地域との関わりが出てこない。アミティ舞洲にも母親とだけ行っていたのだろうか、そんな生活であればストレスもためるだろうと思う。一番驚いたのはコメント。「…専門家が助言して施設などが介護を担う仕組み作りを急がないと悲劇は繰り返される」40年前、そうやって入所施設を作り、地域から隔離し、人権侵害を繰り返してきた事実を忘れたのだろうか。地域にある社会資源をつなぎ、充実させる、ノーマライゼーションやインクルージョンという発想はどこにいったのだろうか。44年間母と子がずっと一緒…そんなのは本当の愛なのだろうか。（いしだ）

【一昨年の事件の新聞記事】 介護疲れ、44歳の知的障害次男を殺害 - 同情の声多数

大阪市浪速区日本橋東の自宅で知的障害を持つ44歳の息子を殺害したとして、大阪府警は22日、母親の山口喜代子容疑者を殺人の容疑で逮捕した。44歳の次男は生まれつき喋る事も動くこともできず、車いすで生活しており、山口容疑者が介護をしていたという。

山口容疑者は「介護に疲れた。今年初めから殺すことを考えていた」と供述している。

この、あまりにも悲惨な事件にネットからは「悲劇だ」や「無罪でいい」との声が多数挙っており、同情する声が多数見受けられる。